

## 引喩と暗喩（八）

——源氏物語における白氏文集、「薔薇正開」など

### 一 薔薇正開春酒初熟因招劉十九張大夫崔二十四同飲

——賢木

薔薇——バラは今日でもヨーロッパふうで古代日本にはなじみがたい気がするが、一見の予想を裏切つて、古典に登場する。もつともイバラ（ウバラ）といえはすでに『万葉集』にも見える野生の植物で、日本人にも親しい植物だが、薔薇として新たに登場するものは、平安時代になって、文献として渡来したものであろう。

薔薇は『菅家文草』（巻五）に早ばやと姿を見せる。

一種薔薇架 芳花次第開  
色追膏雨染 香趁景風来  
数動詩人筆 頻傾醉客杯  
愛看腸欲断 日落不言廻

（四〇三）

これによると薔薇は色の濃さと香気が愛され、その詩文に愛された来歴がしのばれている。第五句「数動詩人筆」というのは、中国の文人詩人たちに薔薇の詩が多いことを道真が知っていたことを意味する。ちなみに『芸文類聚』（巻八十一）をひもといても斉の謝朓、梁の簡文帝、同じく元帝などの詩が並んでいる。

右の六朝以後も同様で、まさに白楽天も何度か薔薇の花を歌う。

「戲題新栽薔薇」（巻十三）「戲題盧秘書新移薔薇」（巻十五）「薔薇花一叢独死不知其故因有是篇」（巻十六）その他だが、じつは右の文章詩も冒頭の「薔薇架」は白詩の題名によったものである。

白詩には「薔薇正開春酒初熟因招劉十九張大夫崔二十四同飲」（巻十七）と題する薔薇の詩もあり、なかんづくこの一詩は日本に知られて人口に膾炙したらしい。この詩の一節が「千載佳句」にとられ『和漢朗詠集』にとられ、『枕草子』『堤中納言物語』『栄華物語』

中西進

にと登場する。その人氣がしのばれるというものであろう。

次のような詩である。

甕頭竹葉經春熟 階底薔薇入夏開

似火淺深紅壓架 如錫氣味綠黏台

試將詩句相招去 倘有風情或可來

明日早花応更好 心期同醉卯時杯

もつとも右にあげた諸書にとられるのはすべて第一、二句で、これは最初にとり上げた『和漢朗詠集』の影響だといわざるをえない。たとえば『堤中納言物語』（逢坂こえぬ権中納言）で「中納言、またかで給ふとて堦のもとさうびとうち誦じ給へるを」というごとくである。

ついでながら『枕草子』（五十七段）がそうした諸書の中にあつて、「さうび近くて枝のさまざまむつかしけれどをかし、雨など晴れゆきたる水のつら、黒木のはしなどのつらに乱れさきたる夕ばえ」と趣をとつて表現を改めているのは、さすがである。

さて、わが源氏物語も、白詩の当の個所を引く一つである。

二日ばかりありて、中将負態まけむぎしたまへり。ことごとしうはあらで、なまめきたる檜破子ひわこども、賭け物などさまさまにて、今日も例の人々多く召して文ふみなど作らせたまふ。階はしの底もとの薔薇さうひけしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。

（賢木）

源氏二十五歳の夏である。これに先立つて源氏と頭中将とが韻塞ふたぎをし、中将が負ける。そこで二日ほどして負態をするということになった。その折階段の下の薔薇がほんのわずかに咲いていた。その風情は春の桜、秋の紅葉にくらべて「しめやかにをかし」というそのこととあいまって、人びとはうちとけて管弦の遊びに興じた。

この薔薇を白詩の引用と考えることが古來行なわれてきた。『枕草子』同様詩句を口誦するといったものではなく、さり気なく「階の底の薔薇」というだけだが、すでに述べたような『和漢朗詠集』以下のあり方を考え合わせると、引用はまったく疑いのないところであらう。

それでは作者は、なぜここに白詩をもってきたのか。

そもそもこの個所は上述のように韻塞の負態の部分である。先立つて頭中将はたくさん漢詩集をもつてき、源氏もまた書庫から珍しい詩集をとり出して、大学の者どももまじえて韻塞が行なわれた。そのなごりとしての部分に薔薇詩が登場するのであつて、極端にいえば、この書物の中に白氏文集があつてもよいのである。いやむしろあつた公算が、当時の白詩享受からいえば、大きい。読者の連想に沿う形で、作者は「階の底の薔薇」の一句を用いたといつてよいだろう。

いや、そういうと引用は韻塞という中国ふう風流に歩調を合わせるためだけのものと思われかねない。もつと積極的な意図が見失わ

れてはならないだろう。

この白詩は、そもそも『千載佳句』の「招客」に載せられるように、薔薇の開花によつて客を招いて酒を楽しむという詩である。

試將詩句相召去 倘有風情或可來

というごとくであり、明日でもなおよいだろうという。

明日早花応更好 心期同醉卯時杯

「卯時杯」は白氏が好んだところで、「卯酒」としてしばしば詩に登場する。朝六時の酒である。

この、友と風流を共にするという心情は、当面の「賢木」において、もつとも重要なことであつた。この韻塞のくだりの初めのところも、左大臣家の失墜が目に見えて、その、

すく世に用ゐられて、心地よげにものしたまひしを、こよなうしづまりて、三位中将なども、世を思ひ沈めるさまこよなし。

(賢木)

というごとくである。頭中将(三位中将)は右大臣家の四の君を妻としてゐるにもかかわらず、

心とけたる御婿の中にも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。

といった具合であつた。こうした中での憂慮をなぐさめるための韻塞で、そのためにこそ薔薇の「しめやかに」あることがおもしろかつたのであろう。

白氏における劉、張、崔の友人との交友がいま源氏や頭中将を中心として集まつた人びととのそれである。源氏の作者が心中に描いたものは、まずは白氏をとりまく交友になぞらえるということであつたろう。

そしていま話題とする源氏をとりまく情勢が、日々劣敗の度を深めてゆくことは、ひとり左大臣家の衰退ばかりではない。

私はいつも思うのだが、「賢木」に神などというゆゆしき巻の中に語られることの、何と不吉なことか。この巻名が由来する和歌は野宮における源氏と御息所との贈答で、いかにも森厳の感をあたえるにしても、これは伊勢下向の前段であり、またやがて桐壺の帝が崩御する。それにともなつて藤壺は落飾して生身としての死をとげ、左大臣は致仕し、時勢は右大臣側に移る。

それでいて、このさ中に源氏と朧月夜との密会があり、事は露見して、「白虹日を買けり」といわれるまでに源氏は追いつめられる。

作者は、これでもかこれでもかと不遇のどん底に源氏をつき落とすかのように源氏を描く。この運命の翻弄の中ではもう正当な判断もできなくなつてしまうことを暗示するとき構想が朧月夜との事件である。

おぞましい人事を、いやというほどに語りつづけ、やがて須磨隠居へと主人公を運ぶ筋立てが、神を表象とする巻の中に語られることに、私は戦慄をすら覚える。

こうした中で「しめやか」に薔薇が咲く。その背後に広がるのが、まさに江州流謫の中で交友を楽しむ白詩の世界であった。

しかも白氏には、次のような薔薇詩がある。すでに編名をあげたものだが、

柯条未嘗損 根発不首移

同類今齐茂 孤芳忽独萎

仍憐委地日 正是带花時

碎碧発凋葉 焦紅尚恋枝

乾坤無厚薄 草木自榮衰

欲問因何事 春風亦不知

〔薔薇一叢独死不知其故因有是篇〕卷十六

である。薔薇をひどく愛したらしい白楽天にとつて、一叢だけ枯れたこの薔薇は、たいそう心にかかったらしい。そこで何というかという、この天地は厚薄もなく平等で、草木とて榮衰は自然である。だのに一体何のゆえに枯れるのかといぶかる。

春風にききたいが彼もまた知らないというのは何か韜晦のように思えるではないか。じつは「一叢独死不知其故因」には、深い人々への思いがあるのではないか。少くとも新樂府作者としての硬骨詩人をなぞらえれば、その寓意を手放すことができない。

白氏自身いま江州にあつて、さらには忠州へと配流される身上にいる。「一叢独死」とは自分たち一統と読みかえることもできよう。

そしてそのことを「賢木」の当面にはめ込むと、じつによく当てはまる。いま左大臣家一叢には独りの死が訪れていて、「不知其故因」。その中で韻塞また負態の遊びの中に集まる人たちは白詩における「將詩句相招去」の人たちとひとしい。

すでに示した道真の詩が薔薇の架をよんだように、薔薇には架が作られ、白詩にも薔薇の架に題する詩があることもすでに述べた。

そこで白楽天は歌う。

托質依高架 攢花对小堂

と。高架は薔薇の高質を托すべきものであり、攢られた花とても小堂に対すべきものであつた。ここには薔薇に高質を見出している白楽天が見えているであろう。

薔薇を江州で愛している白楽天には気高い矜持がある。同じく劣勢の中にありながらも、源氏の周辺にも孤高の矜持があつた。「芳花次第開」とか「香趁景風来」とかという道真の詩も高質をいうものであろう。それらも源氏物語が背景として配したものの一つである。

また、薔薇には「新栽」とか「新移」とかと、植栽することが目立つ。

移根易地莫憔悴 野外庭前一種春

少府無妻春寂寞 花開將爾当天人

〔戲題新栽薔薇〕卷十三



風動翠条腰嫋々 露垂紅萼淚闌干  
移他到此須為主 不愛花人莫便看

〔戯題盧秘書新移薔薇〕卷十五

そしてこの中で語られるものは、根を移して土地をかせようととも枯れさせるなどか、他からここに移し植えて主となすとかといった言辞である。いかにも人事がこめられている口吻で後者「主となすとも、花を愛さざる人をして看しむるなかれ」というのは、知己を求める言いようである。やはり謫地における矜持とその理解を求める寓意が薔薇にあると思われる。

雲漠風塵俱是繫 薔薇花委故山深  
憐君独向澗中立 一把紅芳三処心

〔和王十八薔薇澗花時有懷蕭侍御兼見贈〕卷十三

これにしても薔薇はきわめて人格的に造型されていて、けっして一つの植物ではない。王十八は王質夫、親交があつて、王が戦死した時に「哭王質父」を作ることなどから見ると思は深かったと思われる。

そして、この人間の影を映す薔薇は、上にあげた詩句の中でも、もっとも意味深い。「戯題新栽薔薇」の「少府無妻春寂寞 花開將爾当夫人」は、かりに軽い気持から歌われたものにしても「当夫人」といわれたものが薔薇であることは、看過できないだろう。この時縣尉（少府）が妻を失っており、そのためにも新栽の薔薇は憔悴さ

せてはならないし、さらに花開いて夫人とならなければならぬのである。

こうした白楽天の薔薇への思い入れをもったものがいま引用されたとなると、当面の白詩は衰運の中での交友を楽しむべき「招客」の意味のほかに、その衰運への問いかけ、そしてまた衰運にあつての矜持を示すものであり、さらにまた重大なことは「夫人」に擬せられる花が薔薇であつたことだ。

女人像を仄見せしめる薔薇といえ、この際は藤壺を措いていない。藤壺は前年出家という一種の擬似死をとげている。その出家をめぐる悲嘆は、先立つて長々とつづられたところであり、その揺曳が「薔薇けしきばかり咲きて」「しめやかにをかしきほど」の叙述になつたと見ることは、できないだろうか。

可能となれば、この薔薇の見事なメタファに、声をのまざるをえない。

二十年三月三十日別微之於澧上十四年三月十一

日夜遇微之於峽中停舟夷陵三宿而別言不尽者  
以詩終之因賦七言十七韻以贈且欲記処遇之地  
与相見之時為他年會話張本也——須磨

「須磨」に白氏文集の引用が多いことは、よく知られている。源氏物語全体からいっても冒頭における「長恨歌」と末尾における「李夫人」の引用は多く、引用がいかに意図的だったかが知られるが、

さらにもう一つ、別の角度から用いられたものが「須磨」における白詩である。

別の角度といったのは、いうまでもなく配流である。白楽天の江州・忠州左遷を源氏の須磨退居にあてることによつて、退居がいかにわびしいものであったかを強調しようとしたのである。

したがって「須磨」では江・忠州時代の白詩が引かれ、その幾つかはすでに見てきた。その上にまた引用されるものが、夷陵で白が元稹と逢った時の、長い題名の詩「十年三月三十日別微之於澧上十四年三月十一日夜遇微之於峡中停舟夷陵三宿而別言不尽者以詩終之因賦七言十七韻以贈且欲記処遇之地与相見之時為他年會話張本也」(卷十七)である。

元和十年(八一五)、白楽天四十四歳の時、彼は長安昭国里にあつたが、元稹が河南の唐州從事から長安に召還されたので、ともに都で詩酒を楽しむことができた。のち三月二十五日、元稹は通州司馬に任ぜられた。三月三十日、澧水(渭水の支流)のほとりで二人は別れた。詩題の冒頭に述べるごとくである。

そして同年八月、今度は白が流謫の道を江州司馬として迎ることとなる。この三年後、元和十三年(八一八)四十七歳の十二月二十日、白はさらに忠州刺史に任ぜられ、翌十四年三月二十八日に忠州に到着した。<sup>(1)</sup>

元稹と出会ったのは偶然で三月十一日の夜夷陵(湖北省、宜昌

県)においてであつた。この経緯について、施鳩堂氏は「時由潯陽浮江上峽、三月十一日至夷陵會微之、薔薇之自通州移虢州長史、而弟行簡亦相從而來」という。<sup>(2)</sup>

さてそこで白詩を写しておこう。詩も題名におとらず長い(詩中挿入の説明句は省略)。

澧水店歌春尽日	送君上馬謫通州
夷陵峽口明月夜	此処逢君是偶然
一別五年方見面	相携三宿未廻船
坐従日暮唯長嘆	語到天明竟未眠
齒髮蹉跎將五十	関河迢遞過三千
生涯共寄滄江上	郷国俱抛白日辺
往事渺茫都似夢	旧遊零落半帰泉
醉悲灑淚春杯裏	吟苦支頤曉燭前
莫問龍鍾惡官職	且聽清脆好詩篇
別来只是成詩癖	老去何曾更酒顛
各限王程須去住	重開離宴貴留連
黃牛渡北移征櫂	白狗崖東卷別筵
神女台雲間繚繞	使君灘水急潺湲
風淒暝色愁楊柳	月弔宵声哭杜鵑
万丈赤幢潭底日	一条白練峽中夫
君還秦地辞炎徼	我向忠州入瘴煙

未死会応相見在 又知何地復何年

そして一方、源氏では次のようにこの詩を引用する。

飛鳥井すこしうたひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、「若君の何とも世を思さでものしたまふ悲しさを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」など語りたまふに、たへがたく思したり。尽きすべくもあらねば、なかなか片はしもえまねばず。夜もすがらまどろまず、文作りあかしたまふ。さ言ひながらも、ものの聞こえつつみて、急ぎ帰したまふ。いとなかなかなり。御土器まゐりて、「酔ひの悲しび涙灑ぐ春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。

(須磨)

時に源氏二十七歳。前年三月下旬に須磨に到着して、ほぼ一年がたっている。「二月二十日あまり」から三月上巳までの間のある日、頭中将が須磨に見舞にやって来た。その折のことである。

この時二人が「もろ声に誦じ」たのが上掲の白詩の一節「酔悲灑涙春杯裏」だという。季節も同じ三月、むしろこの詩を用いるために頭中将の須磨訪問をこの時期に設定したとさえ、いえそうである。何しろこの句に先立つ「往事渺茫都似夢 旧遊零落半帰泉」は『和漢朗詠集』(懷旧)にとられている(『千載佳句』へ感嘆)にも)から、当時有名な詩だった。その効用を源氏の作者なら十分利用したはずである。

しかも源氏の叙述そのものも白詩に依るところがあつたように思

われる。源氏の中に「尽きすべくもあらねば、なかなか片はしもえまねばず」とあるのは、作者が二人の心境を十分表現できないから、かえって描写なんかしないと、珍しく表面に歌を出した部分である。こうしたことをいうのも白詩で「言不尽者以詩終之」というのとひとしいところを見ると、白詩を傍においた表現のように思われる。

また「夜もすがらまどろまず、文作りあかしたまふ」も「坐従日暮唯長嘆 語到天明竟未眠」と同じである。とくに「文」(漢詩)と限定しているあたり、白詩を意図的に誘い出そうとする魂胆と見える。

源氏で誦じたとする次の句は「吟苦支願曉燭前」で、これまた夜どおし詩を作り合つたというのとひとしい。

さて、こうしてみると源氏が口誦の一句を窓口として「十年三月三十日云々」の詩を潜ませたことは明白だが、それでは潜ませた意図はどこにあつたのだろうか。

すでに多くの人が気づいているように、白詩を擬すると、源氏と頭中将という、長く交友を暖めてきた二人は、今や白楽天と元稹とに重なることとなる。まずは源・頭二人の交友が元・白に匹敵するほどに親密なものだったことを暗示しようとしたのである。

こうした友人のなぞらえは、古来多い。先立つ奈良時代にも山上憶良は伴旅人との関係を李陵と蘇武との関係に擬し、伴家持は伴地主との関係を劉琨と盧諶との関係になぞらえようとした。そ

れとひとしい着想である。

とくに白詩にずっと付き合ってきた源氏の読者は、やがて元稹が登場することをのぞんでいたかもしれない。「須磨」では、すでに昨秋「二千里外故人心」という、宿直の夜月に対して白が元を憶った詩が口ずさまれているから、二人の交友関係は退居後半年にして姿を見せた。

この元・白を伏線として、今や明らかに頭中将と源氏が謫地に会し、完全に元・白と源・頭とが重なった次第である。

「十年三月」の詩では元は虢州へ行く。白詩のことばでいえば「君還秦地辞炎微」のだから都世界へいくのであり、白は忠州（四川省達県）へ赴く。さらに「我向忠州入瘴煙」こととなる。

これは頭中将が都へ戻り、源氏が辺陲の地にいることと重なる。つまりは須磨は炎微の地であり瘴煙の地ということに他ならない。そこに源氏をおいて、頭中将は都へ帰る、その別れが源氏物語の筋立てを強調することとなろう。

また白詩は「莫問龍鍾惡官職 且聽清脆好詩篇」という。「龍鍾惡官職」はお互いに忠州や通州に在職する失意をいうのだが、それは同時に、いま源氏が須磨にあること、左大臣は致仕していること、そして頭中将すらが「心とけたる御婿むこの中うちにも入れたまはず」（賢木）という仕打ちの中うちに在ることを示唆するであろう。とくに源氏がかうして須磨に退居していることを「龍鍾惡官職」の語をもって

暗に訴えようと思われる。

だからここで「文作りあかしたまふ」とは「清脆好詩篇」をきこうとする試みに他ならない。

そしてまた佳句以来の「往事渺茫都似夢 旧遊零落半帰泉」が当の須磨の場面上に連想されたとすれば、これは偉大な比喻力をもっているのではないか。

すでに「賢木」のところ述べたように、この巻に限っても桐壺の崩御、藤壺の落飾、六条御息所の下向、左大臣の致仕があった。

さらにさかのぼれば妻妾の上の死は五年前であり、夕顔も母更衣も死んでいる。旧遊は零落し半ばは泉に帰しているではないか。

なまじ頭中将が来ることによって、都でのわが身の過去が垣間見られたというべきだろうか。須磨退居が光源氏前半生の一つの終着点——もちろんそこから蘇生はするのだが、個別に仕組まれた、光源氏を主人公とする、一つの人生の全過程を、ここに収めてみると、この零落にいたる往事は、渺茫として夢のごとくであつたろう。

白詩の一句は短い引用にすぎないけれども、ここにこめられたものは「旧遊零落半帰泉」という前半生への回想を、読者に訴えるものだったと思われる。

もとより、こうした素直な述懐は、元・白に匹敵する頭中将との友情を通してしか、なしえないものであつた。

### 三 春江—竹河

文集卷十八に収められる「春江」という詩がある。

炎涼昏曉苦推遷 不覺忠州已二年

閉閣只聽朝暮鼓 上樓空望往来船

鶯声誘引来花下 草色勾留坐水辺

唯有春江看未厭 縈砂遶石簞淥潺湲

一読知られるように第四句が小野篁の故事をもつて有名な一編である。簡単にいえば嵯峨天皇が「上樓遙望往来船」の句を示したところ、篁が「遙」を「空」にかえるともつとよいでしょうといったという逸話（江談抄）で、すでに嵯峨朝に白氏文集が入っていたかいないかが、よく問題にされる詩である。

伝来の時期はともかく、この逸話は当詩が世上よく知られていたことを物語るであろう。『千載佳句』（春遊）『和漢朗詠集』（鶯）に、  
鶯声誘引来花下 草色勾留坐水辺  
が引かれるのも、故なしとしないであろう。

白がこの詩を作ったのは忠州に来て二年というから元和十五年（八二〇）である。前年三月二十八日に到着したので、正確にいうと一年ほどである。時に四十九歳。ちなみにこの年冬、白は帰京した。さてこの詩はいかにも有名らしく、源氏物語にも引用されている。内より和琴さし出でたり。かたみに譲りて手触れぬに、侍従の

君して、尚侍の殿、「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひたまへ」と聞きわたるを、まめやかにゆかしくな。今宵は、なほ鶯にも誘はれたまへ」と、のたまひ出だしたれば、あまえて爪食ふべきことにもあらぬをと思ひて、をさをさ心にも入らず搔きわたしたまへるけしきいと響き多く聞こゆ。  
（竹河）

すでに鬚黒がなくなった後の玉鬘一家のもとへ薫が蔵人の少将とともに入っていった折のことである。

御廉の中から和琴をさし出すのに男二人が譲り合つて手を出さないものだから、玉鬘が「なき頭の中將の弾き方に似ていると聞いているからぜひ聞きたい。今宵は鶯に誘われて下さい」という。薫は、はにかんでいる場合ではないから弾くと、豊かな音色をたてた、というのである。

この「鶯にも誘はれたまへ」が「春江」の例の一句、佳句以下にあげられたものを引用したものだと考えられてきた。「鶯に誘はれる」というだけで「春江」と関係づけるのは危険だとも思えるのに、古来多くの注釈書がそう断じてきたのは、やはり上述の「春江」の普及度によつていであらう。たしかに篁の故事以来の知識人にとっては「鶯に誘はれる」から「春江」を切り離すことは、むづかしかつたかもしれない。

なるほど玉鬘未亡人の一家は白楽天の忠州生活ほどにも、あれこれと心労があつた。玉鬘はわが子をめぐつて人間関係に気を遣う。

冷泉院への大君の参院をめぐる周囲の非難や嫉妬や落胆。中の君の今上帝への入内とそれにとまなう配慮。そして男の子とても右兵衛督、右大弁で参議になれないことが「愁はし」い。

こうした中で亡き夫が慕わしいことはいうまでもない。

さらに玉鬘の、父頭中将への思慕も大きい。「常に見たてまつり睦びざりし親」だったから一層強かったというべきであろう。のみならず登場人物は多く頭中将に関係し、蔵人の少将も夕霧と雲居雁の子だから、母方の祖父が頭中将である。薫は柏木の子だから、やはり頭中将は祖父になる。何よりも大きいのは縁薄かった玉鬘からの思慕であるにしても、周辺の人々は故頭中将の糸によって束ねられているように見える。

こうした中の玉鬘の心境を忠州の白楽天のそれに擬することができであろうか。少くとも爽快に愁いなき歳月が経過しているとはいえない。玉鬘がわが子の出世できないことを愁うことはすでにふれたが、鶯に誘われよといった直後でも父を思い出して泣く。それも「古めいたまふしるしの涙もろさにや」と作者はいう。

いわば精神的な流謫空間といったものの中に玉鬘の心境を思いやることができるとすれば、白詩にいう「閉閣」の状態で、その中にあって、ただ心を安らげるものは鶯に誘引された花下であり、草色にひかれてやって来た水辺であった。「鶯に誘はれたまへ」とは薫に対する勧誘であるにしても、じつは玉鬘自身が誘われて、出てし

まいたい状態だったと思われる。

「唯有春江看未厭」という、春江を見る以外は快々として楽しまない心境も同じだったであろう。

また薫自身も「閉閣」の中にあるといえる。彼は「まめ人」をもつて知られ、自分自身も「うれたしと思」っている。そこで「すき者ならはむかし、と思して」玉鬘の邸へやってくる。それに鶯に誘われよという勧誘を重ねて考えると、この勧誘は「まめ人」から出てこいという意味にとれ、誘われてやって来るべき「花下」とは「まめ人」の反対の華やぎの世界となる。

いま問題としている少し前に、玉鬘のいる念誦堂に招じ入れられる。その時も、

鶯の初声もいとおほかなるに、いとすかせたまほしきさま  
のしたまへれば、  
(竹河)

つまり鶯の初声につられて、この「まめ人」に好き心を少しあおりたててあげたいというのであり、ここでも「まめ人」に対する華やぎ「花下」への勧誘がある。

こうみてくると玉鬘にせよ薫にせよ、今住んでいる世界はけして如意の場所ではない。そこに「鶯に誘われよ」ということばが生きてくる理由があつたであろう。多少極端だとしても、この引用の窓口を通して読者がいざなわれる世界は、白楽天の忠州に見合うような二人の世俗の不如意空間であり、その中で心をつなぐことができ

るとすると、わずかに花下、水辺の自然しかないという源氏作者の主張である。

この花下、水辺は人為を離れた天然の世界である。そういえば「竹河」一巻は賑やかすぎる。この賑やかさの中には人間世界の気ぜわしさこそあれ、天然の安息はない。むしろ賑やかな「竹河」は人間ドラマとして成功しているといえるべきかもしれない。

その中で花下への勧誘は、まさしく玉鬘の勧誘に他ならない。

#### 四 七言十二句、贈駕部吳郎中七兄——胡蝶

世によく話題となるように、「玉鬘」の巻で九州から姿を現わした少女、玉鬘は、それ以後の巻々の中心となつて成長していく。右にふれた「竹河」が未亡人としての彼女をまで女主人公とするほどである。

この構想は奥行きが深い。九州を竹にかえれば玉鬘はかぐや姫であり、一旦鄙へ身を沈めてから晴舞台に登場してくるパターンは他でもない光源氏をはじめとして、死と再生の説話の型の中に多く用意されている。源氏がこの型を大きくとり入れていることは看過できない。

そしてこの女主人公は玉鬘と通称される。玉鬘といえはすぐに古歌の「人はよし思ひやむとも玉鬘影に見えつつ忘らえぬかも」(萬葉集)が連想されるように、夕顔の影を背負った、半ば影の女性で

ある。「きと影になりぬ」というのは「竹取物語」のかぐや姫について描写である。

もちろん、こう書いている私自身、玉鬘がもっている肉体性を忘れているわけではない。

手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、

(胡蝶)

とされる玉鬘はむしろ肉体派ですらある。

しかしこれは、あの古物語の筋を大幅に人間化、世俗化した結果であろう。まことに、月からの仙女が竹から誕生したという口ぶりを、受領に養われていた女が筑紫の鄙から上京したといいかえただけのことは、もくろまれていたのである。

およそ、玉鬘物語はそのような骨格と肉付けをもっているかに思えるが、さてその中で、玉鬘を六条院に迎えた翌年、光源氏三十六歳の夏に、源氏は早ばやと玉鬘に言い寄る。その一節が次である。

雨のうち降りたるなごりの、いとものしめやかなる夕つ方、御前の若楓わかかえでかしはぎ柏木などの青やかに茂りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出だしたまひて、「和して且清しまた」とうち誦じたまうて、まづこの姫君の御さまのにほひやかげさを思し出でられて、例の忍びやかに渡りたまへり。

(胡蝶)

雨上がりの空が「和してまた清すがしい」といいながら玉鬘の匂



うようなあでやかさを思い出したというのだが、この「和して且清し」は白氏文集の一句である。

四月天氣和且清 綠槐陰合沙隄平

獨騎善馬銜鐙穩 初著單衣支體輕

退朝下直少徒侶 歸舍閉門無送迎

風生竹夜窓間臥 月照松時台上行

春酒冷嘗三數盞 曉琴閑弄十餘聲

幽懷靜境何人別 唯有南宮老駕見

題を「七言十二句、贈駕部吳郎中七兄」(卷十九)という。この初

句を誦じたとされて久しく、誰の目にもそれは認められるであろう。

たしかに、この詩は大層有名であった。『千載佳句』(首夏)には

第三、四句がとられ、同じく「風月」の部には第七、八句が見え、

また同じく「琴酒」の部には第九、十句が登場する。

さらに『和漢朗詠集』(夏夜)にも第七、八句が採用されているか

ら、ちょうど半分の句が朗詠、愛誦されていたことになる。

この趨勢からすると源氏の口誦は必ずやこの詩の初句であろうが、

それにしても他の流行をさけて初句をとったあたり、作者の教養と

気骨とが示されている。

そしてもう一か所、この口誦を伏線として当の白詩がひめられる。

右のように玉鬘のもとに出かけ、時が移る。

雨はやみて、風の竹に鳴るほど、はなやかにさし出でたる月影、

をかしき夜のさまもしめやかなるに、人々は、こまやかなる御物語にかしこまりおきて、け近くもさぶらはず。(胡蝶)

とあり、最初の「風の竹に鳴るほど、はなやかにさし出でたる月影に」が右の詩の第七、八句を下敷にしたものと考えられてきた。これだけだと白詩を感じるのは無理だが、先の引用を連ねてみると、やはり白詩にもとづくものとすべきであろう。

しかし、一般の印象はどうであろうか。白詩は晴朗な夏の日、早朝の出勤をおえて家に帰り、ひとり門を閉じて閑暇を楽しむ。夜になると風月の中で酒をたしなみ、夜明けには少々の琴に興ずる。

そんな幽懷、静境はあなたしか理解してくれない、という詩である。すでに述べた江州や忠州の詩ではない。都にあつて平穩な一人の心境を楽しむ詩であり、流謫の苦しみも肉親を失った悲しみも、あるわけではない。

こうした詩が、はたして、かつて情を通わせた女の娘に求愛する時に、どのような効用をもつのか。

いまの私は懐疑的である。しかし多少とも源氏作者の意向に近づいたためには右の詩でわが心境を理解してくれるものはあなただとい

った、その友吳丹(駕部吳郎中七兄)の心境を探るべきであろう。<sup>(3)</sup>

吳丹は白と同時に進士に及第し、同年だったという説もあり、親友であった。「贈吳丹」(文集卷五、元和五年(八一〇)白三十九歳)が知られるばかりか、その死を悼んで「故饒州刺史吳府君神道碑銘并



序」(文集巻六十、宝暦元年へ八二五) 白五十四歳) を作り、翌年旧友の死を悲しんだ中にもその名が見える(「花前嘆」文集巻五十二)。

白をしてこのように親しませた理由は呉丹の生き方であつた。

「贈呉丹」からそれを探ると、

巧者力苦方 智者心苦憂

愛君無巧智 終歳閑悠々

というから、呉丹はさかしらを捨てた人であり、

宦途似風水 君心如虚舟

汎然而不有 進退得自由

という仕官ぶりであつた。だから生活ぶりも、

冬負南簷日 支体甚溫柔

夏臥北窓風 枕席如淳秋

南山入舍下 酒甕在牀頭

といった具合である。アーサー・ウェーリーが彼は「熱烈な道教信者で」、

「人の多い地区、安邑里に住んでいたが」「この小さなオアシスは、道教の天国の縮図となつた」ということも承認されるであらう。

先に引いた白詩の境地もこれとひとしいものであつた。あの天氣が「和且清」と感じた時、白の中に「オアシス」をかいま見た

思いがあつたのである。

しかしこれは、白にとっては憧れの境地だつたらしい。だからなおのこと呉丹に魅かれるのであらう。

つまり白の生身はまったく正反對だと自らは感じている。右のように呉丹の人格をたたえる一方で、まったく反対に自分を評価している。

顧我愚且昧 勞生殊不休

一入金門直 星霜三四周

主恩信難報 近地徒久留

考えてみれば上言しては流謫されること再度だった白は愚直にすぎたというべきだろう。宦途にあるばかりに地方官を幾度となくり返したことも、考えてみれば愚かしかったかもしれない。いや、これほど膨大な詩を作ること——あらゆる機会にあらゆる反応を示し、あらゆることばで心を表現しつづけた七十五年も、まことに愚かしかったかもしれない。いかにも世俗的だとさえ、いえるかもしれない。

この「贈呉丹」を作つたころのこととして、堤留吉氏は「我愚にして且つ昧く…」とか「剛狷の性多く、世と塵を同じうし難し…」などのものいいも少くない」といい、三十九歳のころに白の心がしきりに自己の世俗性に向けられていたことを指摘している。<sup>(5)</sup>

さて、このような事情を知つた読者が源氏物語を読むと、どのようなのであらう。

すでに須磨・明石体験から復活し、六条院を築き、四十の賀を四年後に控えて、源氏の大きさと豊かさは限りもない。同じ「胡蝶」

でも春の船業が美々しく行なわれた。

この地位の安らかさは、右の白のそれと同じである。馬をかって舗道を往来して出仕をくり返す日々を白ももっている。

しかもその中で悠然と孤独を楽しむ時間は憧れのように訪れるだけで、白の愚昧、剛狷の性はきえたわけではない。たまたま訪れたゆえに呉丹を思い、その折を貴重に感じたのである。

この心境は、存外に光源氏にも近いのではないか。安寧や栄華の中で天候の晴朗にふれて、もつと本質的なものが見えてくる、という事情は、白にも源氏にもあつたであろう。

程度からいえば源氏ははるかに世俗的、愛欲的だし、彼らが求めたものは道教的な救済よりは仏道への悟入だったから、この差ははっきりさせておかなければならないが、明澄への希求を無視するわけにはいかない。

あるいは「この姫君の御さまのほひやかげさ」とは、源氏にとつて救済だったであろうか。「和してまた清し」に通じるものがないければ、「思し出でられ」ることはないのである。

私はいま源氏物語を古典文学全集本に助けられて見ているが、「七言十二句」を二度目に引いたとされる「風の竹に鳴るほど」の竹を、この本の頭注は前出の竹だとして、わざわざ注意をうながしている。前出の竹とは、

御前近きの呉竹くれたけの、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさま

のなつかしきに、

(胡蝶)

とあるもので、もとより玉鬘を仮託した表現である。

玉鬘のイメージをだぶらせた竹が風に鳴るほどに月がはなやかにさし出し、「をかしき夜のさまもしめやか」だという。ここには「和して且清し」の口誦からここへと流れてくる一貫した情調がある。けして、先ほど玉鬘を肉感的だといったものとは、同質ではない。その証拠が「夜のさまもしめやかなるに」という幽寂な超世俗的な把握である。

一方に肉体派の玉鬘をおき、片方に和にして清なる心境をおきながら、このあたりの筆が進む。おそらくそこに、源氏の二つの心があるであろう。

主としてあるものは世俗の栄達や愛欲である。そしてそれとはあい反するものとして一方に和清の呉丹の世界がある。後者は前者を時としてつつき、痛みを疼かせる。

こうした構図を考えることが誤りでないとすれば、あい反する二者の間にある玉鬘は、いかなる存在であろう。「和にして且清」といつてすぐ思い出す存在なら後者につながる女であり、その結果として前者に気づかせる女だということになる。

ついには鬚黒の妻となることも知っている読者にとっては、やはり源氏にとって幻の女が玉鬘だということであろう。この場合も両者の間にあつて、どちらとも位置を定め切らない女が玉鬘である。

私はいままで何度か、源氏は愛欲批判の書物だといってきた。<sup>(6)</sup>この場合にも愛欲を片方から見つめている醒めた目を感じるのは、私だけであろうか。玉鬘をついに、まさしく玉鬘——影にしてしまうような目を。

## 五 七言十二句、贈駕部吳郎中七兄—少女

「贈駕部吳郎中七兄」の詩はもう一つ「少女」の巻に引用されるというのが、『孟津抄』の説である。<sup>(7)</sup>

いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁<sup>かり</sup>の鳴きわたる声のほかに聞こゆるに、…

(少女)

この「風の音の竹に待ちとられて」が白詩の一節の応用だという。「風生竹夜窓間臥」の部分である。

たしかに風と竹の組合せがあり、障子に寄りかかるというのが「窓間臥」と近いともいえる。

しかし、右の部分は十二歳の夕霧が十四歳の雲居雁におさない思慕の念を抱いていて、しかし祖母大宮から今、仲をさかれようとしている場面で、すでに述べた白楽天の心境とはかなり距離がある。

むしろ晴朗の気持とは逆に、右にあげた部分につづけて、

幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、

(少女)

とあり、心を乱すものとして竹の風を用いている。「風の音が竹に

待ちうけられていて、抱えられて、そのためにそよそよと音を立てる」という表現は、まるでなまじな恋心が相手がいることによってかき立てられてしまうという人事をなぞったような言い方だから、これは恋心の比喩として用いられたものであろう。

それはちょうど、「雁の鳴きわたる声のほかに聞こ」えたことから「雲居の雁もわがごとや」と独りごとをいったというのと、同じである。

風が竹に生まれやすいのも世の常で、ここには白詩の引用を認めるべきではないと、思われる。

## 六 聞夜砧—夕顔

中国の砧は、まるで一つの記号のように、思婦の悲緒を託して歌われてきた。白詩もその例外ではない。

誰家思婦秋擣帛 月苦風凄砧杵悲

八月九月正長夜 千声万声無了時

応到天明頭尽白 一声添得一聲糸

「聞夜砧」(文集卷十九)という詩である。

そしてこのように中国で伝統を作ったものが、日本に受容されないはずはない。この詩の一節も第三、四句が「擣衣」にとられている(第一、二句をとる本もある)。源氏物語も、この句を踏襲する。

かやうにておはせましかばと思ふにも、胸ふたがりておぼゆ。

耳かしがましかりし砧きぬたの音を思し出づるさへ恋しくて、「正に  
長き夜」と、うち誦ずむじて臥ふしたまへり。 (夕顔)

光源氏が口誦したのは、朗詠集にも載せる第三句の後半である。  
ところが、この部分は「思し出づる」とあるように先立って砧の  
音を聞く個所がある。今は夕顔がすでに死んでひと月がたっている  
のだが、生前夕顔の家にやどった時、

白袴しろたせの衣ころもうつ砧きぬたの音も、かすかに、こなたかなた聞きわたされ、  
空とぶ雁かりの声、とり集めて忍びがたきこと多かり。 (夕顔)  
という具合であった。

そしてこの部分にも白詩が指摘されている。

凄々冬夜景 揺落長年情

月帯新霜色 碁和遠雁声

暖憐爐火近 寒覺被衣輕

枕上酬佳句 詩成夢不成

『酬夢得霜夜對月見懷』（文集卷三十三）なる詩であり、また『千載  
佳句』（薄命篇）『和漢朗詠集』（擣衣）の、

北斗星前橫旅鴈 南樓月下擣寒衣

も引合いに出されてきた（唐、劉元叔「妾薄命」）。

これらについてはまた稿を改めなければならないが、とにかく夕  
顔はすでに存命中から砧と雁の詩によって薄命を暗示されながら生  
きていたのであり、これとあい応じ合う形で「正に長き夜」の口誦

が設定されたのだった。

先立つ部分は古典全集の頭注が「早朝に砧を打つのは不自然だが、  
漢詩文の材料によって、月、雁、砧を揃えたもの」というほどの無  
理をしてまで、砧を照應させて使いたかったのである。

そして照應については次のような事情もある。「聞夜砧」による  
と長い夜は思婦が砧を打つ夜の長さをいう。作者は聞き手だが、そ  
の長夜につづく砧を聞くと頭が白くなるという。

ところが源氏が「正に長き夜」といった時には砧は打っているわ  
けではない。聞こえていない。それにもかかわらず夕顔を死なせた  
後の夜を長いと感じる時には、先立って砧をひびかせ、そのひびき  
を今のものとして聞くという架空の自分を作らなければならない。  
過去へさかのぼる自分をもう一人作り出し、その自分に納得する形  
で「正に長い夜だ」という思いを述べることになる。

まことによく構想されているというべきで、そのことは月日の計  
算の上にも見られる。夕顔が死んだのは八月十六日、そして今は九  
月二十日ごろである。白詩でいう八月九月という時期にびつたり一  
致するのは、きわめて意図的な筆づかいだと考えられる。

こうした周到さの上に組みこまれた白詩だから、効果は絶大であ  
る。白詩の思婦は長い長い孤閨の夜を夫を想って砧を打ちつづける。  
それと同じほどの思慕を源氏は夕顔に寄せていたことになり、また  
もし夕顔にも源氏への思慕があつたとすれば、夕顔は思婦ほどに孤

閨をかこつていたことになる。あの、伝統的で記号にさえなっているといった、人々の心に深くしみ込んでいる思婦の悲しみがそれである。

「耳かしがましかりし砧」というのは、白詩の「千声万声無了時」に相当する。実際に夕顔の宿にとまった時は「砧の音も、かすかに、こなたかなた聞きわたされ」というから「かすか」と「かしがまし」とが噛み合わないようだが、「こなたかなた」に「千声万声」をあてはめてもよいだろう。逆のいい方をすれば「かしがましかりし」は白詩によつて広い空間を獲得する。この空間のひろがりには、冥界における死者への思慕として、きわめて有効であろう。

また、白は「一声添得一茎糸」という。それほど心痛が源氏にもあったことになる。時に源氏は十七歳、白髪にはもちろん程遠いが、これまた一度に人間を老いこませるほどの痛手だったことが読者に伝わってくる。

そしてまた源氏の方も当日は、

空のうち曇りて、風冷やかなるに、

(夕顔)

という天候だったが、白詩の風景のイメージがこれに重なり、「月苦風凄」という激しさをます。「苦」は冴える意味だが、単に冴える以上の強さをもつて感じられるのではないか。先学が例としてあげるものを並べてみよう。

霜は厳しく月は苦えて、明けんと欲する天

月苦え烟愁へて夜半を過ぐ

(文集卷十九「早朝思退居」)

月色苦えて霜白し

(文集卷六十三「哭師臯」)

(唐李華「弔古戰場文」)

月苦という熟語があってもいい。それほどの月が、夕顔追慕の光源氏の周辺にのぼるのである。

こうして「聞夜砧」の口誦は風景の荒涼化と、その中での白髪にすら到らせかねないような思慕を暗示するものとして採用されたと考えられる。

## 七 題故元少尹集後——梅枝

白楽天と元稹との交友はもはやいうまでもないが、元稹の従兄にあたる元宗簡と白との関係もまた、深い。

その友情はアーサー・ウェーリーの、花房英樹訳の麗文のここから美しい泉の水のように流れでてくる。ウェーリーの記述に従って述べれば、彼は蓮の萼の上の真珠のような露から宗簡との曲江の曾遊を思い出して詩を贈った。元和八年(八一三)のことである。

白は元和十年(八一五)に昭国里に住んだ。東市のすぐ南だが、その時隣に住んでいたのが宗簡であった。白は子孫にいたるまで壁一重をへだてて住むだろうといって喜ぶ(与元九書)。

これだけを見ても二人の交友のあり方がしのばれるであろうが、さて長慶元年（八二二）、白が五十一歳の時に宗簡は没してしまふ。その時宗簡は、わが子元途に、自分の文集の序を白楽天が書いてくれればうれしいと言に残したという。

白は翌年杭州刺史に任じられて転出、やつと宝曆元年（八二五）になつて宿願の「故京兆元少尹文集序」を書くことができた。十一月にこれまた先立つた親友呉丹の神道碑を書き、ついで十二月十日に念願を果たすことができたのである。

また後にふれるとして、元宗簡に対して白がかくの如きであつたことは、「題故元少尹集後」の二首にも思いみなければならぬ。

黄壤詎知我 白頭徒憶君  
唯将老年淚 一洒故人文

遺文三十軸 軸々金玉声

龍門原上土 埋骨不埋名

（文集、卷二十一）

時に白五十四歳であつた。

序もさることながら、この詩も日本でもてはやされた。二首とも『和漢朗詠集』に載せられ、第一首は「懷旧」に第二首は「文詞」に、ともに全四句とも見える。

このようにもてはやされた理由は、やはり「故人文」にあつたろうか。筆跡をふくめて文が人だからであろう。涙を洒ぐことは、そ

の故人の人柄との出会いだつたと思われる。

そこで、じつは右の第一首が「梅枝」に用いられているとされてきた。<sup>(8)</sup>

見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに、またここの紙屋の色紙の、色あひ華やかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見どころ限りなし。  
（梅枝）

今しも明石の姫君の入内が行なわれようとしていて、誰彼が書いたもの、誰彼が所蔵するものなど、多くの書物や筆跡が集められている。兵部卿の宮はかねて所持していた嵯峨御筆の古万葉、延喜帝の古今集なども姫君にさし上げる。この前後、大変な書物の洪水で、その中に今の叙述もある。

これは源氏が書いた草子を兵部卿の宮が見て感動するところで、「見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ」という個所が白詩の引用と見られるのである。

たしかに「一洒故人文」はあまりにも短く、また一般的にいつてもすばらしい筆跡に感涙を流すことは多いだろうから、必ずしも白詩に結びつけることはためらわれるかもしれない。

しかし源氏作者の周到な用意は、この一見の予測を裏切つて、巧みに仕組まれているらしい。

右の「梅枝」の部分で光源氏の文に螢兵部卿の宮が涙を流すこと

はすでに述べたが、じつはこの兄弟は特別な役割を与えられて物語に登場する。

まずは光源氏の須磨退居が迫ると、弟宮は兄の許を訪れて惜別の時をすごす。

親王は、あはれなる御物語聞こえたまひて、暮るるほどに帰りましたまひぬ。

(須磨)

叙述は簡単だが、じつはここに一行弟宮を登場させたのは、次への伏線であった。

源氏が都に帰り、一日、絵合が行なわれる。その時の判者が弟宮であり、双方劣らぬ絵の中で、光源氏の須磨の絵が出されたことによって斎宮の女御方の勝となった。そのところは、次のように記述される。

左はなほ数ひとつあるはてに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、はての巻は心ことにすぐれたるをえりおきたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるは、たとふべき方なし。親王よりはじめてたてまつりて、涙とどめたまはず。

(絵合)

親王——弟宮がこうして源氏の絵を見ては涙を流す気持は、わざわざ惜別に源氏の許を訪れた日から持続するものであろう。けして絵そのものがすばしかったからだけではない。

そしてまた、源氏の須磨退居は他の誰彼にとっても悲しい出来事であったが、弟宮はその一人として悲しんでいるのではない。特別な、兄弟としてもっとも親しく心を交しあえる者として兵部卿宮を設定しているのである。

そのことは、最愛の紫の上を失って、亡きがらになった源氏が、誰とも対面しないなかで、たつたひとり弟宮とだけ会わせるという構想の中にも鮮やかに浮かび上がってくる。

光源氏が弟宮に歌を贈ると、「宮、うち涙ぐみたまひて、返歌をする。源氏の前に、つねにたやすく涙ぐむのが弟宮である。」

こうした間柄は、しかも兄と弟という関係の上だけに設定されたものではない。あの「絵合」の巻に顕著であるように、源氏と弟宮は芸術を論じ合うことのできる間であった。

「梅枝」の「見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ心地して」という一行は、じつはこうした二人の関係の上に記されたものである。この芸術を通して交わし合った心は、まさに白と元宗簡とのそれとひとしい。白が元の書いたものに涙を洒ぐように、弟は兄のゆかりに涙を流す。

立場は逆であっても、一人の流涕を含みこんだものであることも、心情的には近いものがある。

ここで上述のアーサー・ウェーリーの麗文を引用することは、十分に有効であらう。



八二五年の冬の終り、閑暇ができた時、彼は三十巻の軸物がしまわれていた箱を遂にあげ、それらをよみ通した。彼は、それらの詩の如何に多くが、自己の詩への応答として書かれたものであるかを知り、深く心を動かされた。燈のそばでそれらを詠いつつ坐っていると、友の面影が、目前に鮮かに現われ出るのであった。<sup>(9)</sup>

この心境は、かりに生死を分かつ者でないにしても、兵部卿宮のそれに限りなく近いと思うのは私だけであろうか。

私は、源氏の作者が主人公を兄とする弟を登場人物に設定した時、二人の関係をなぞらえられる先蹤を探して、これを設けたにちがいないと思う。よく知られる源氏と頭中将との関係も、親友にして好敵手というあれこれの物語に設定されるものの、類型をもつて考えることができるだろう。

それを白の周辺でいえば元稹と白とになろう。これに対してもう一つ別の、もっと親密な心情で結びついている友人関係が、光源氏兄弟であり、それは元稹の従兄の宗簡と白との関係にひとしいものと作者は見たのであろう。

この「梅枝」の部分は、こうして大きく物語全体に構想された二者の関係から成立したもので、右に引いたウエーリーの説くような、白の宗簡への心情を潜めた部分と考えられる。

「梅枝」のこの後、弟宮は兄にさまざまな書物を贈る。二人の心境

は持統の中にある。

源氏の読者がこの文脈に気づき、かつこの時白が書いた「故京兆元少尹文集序」を知っているとしたら、この文集にこめられた白の気持が、さながら兵部卿の宮の光源氏の文章への気持だということがわかるだろう。

作品は、かくれた意味を含みつつ、優雅で洗練されたものとなる。規模において奥深さや広さをもち、しかも同時に清らかさと美しさをもつ。

かりにウエーリーの訳をかりれば右のような作品感を、兵部卿の宮は光源氏の手に感じたことになる。宮の感動を具体的にする文脈が、この引用であった。

#### 八 題故元少尹集後—幻

いま問題にした「題故元少尹集後」はもう一度、源氏の中に登場する。兵部卿の宮と光源氏との関係が、「幻」の巻でも明示されることをすでに述べたが、再度の引用は、まさに「幻」においてである。

いとかからぬほどの事にてだに、過ぎにし人の跡を見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎に流れそふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがかたはらいたうはしたなければ、おしやりたま



ひて、

(幻)

「降りおつる御涙の水茎に流れそふを」という個所はことばまでも「見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ心地して」(梅枝)と近く、先に引用を認めれば、ここにも認めるべきであろう。<sup>(10)</sup>

この「過ぎにし人」が紫の上であることは、すぐに知られるであろう。いま、その死から一年がたっている。正確にいうと前年中秋がその身まかった時だから、一年がたち、その年が暮れようとしているのである。それをしおとでもするかのように、光源氏は紫の上の手紙などを破り、また焼かせてしまう。

この回想の中で須磨を忘れることはできない。紫の上から届けられたものは「ことに結びあはせてぞありける」。

そこで右のように涙を流すこととなるが、ここで「過ぎにし人の跡を見るはあはれなるを」というのは、先の兵部卿の宮と光源氏の場合以上に、白と故宗簡との関係に近い。光源氏兄弟の関係とて、幽明境を異にした者同士の交情に近かったというべきだろうが、今度のもっと直接的である。

のみならず、光源氏はすでに高齢である。光源氏五十二歳。ちなみに白は五十四歳、ほとんど同じといつてよいだろう。しかも源氏物語は、もうほとんど光源氏一代記のあとを、残していない。この年の年末を迎えると記事はとだえ、あとは「雲隠」の空白に委ねられることとなる。

こうした関係の中で白詩を響かせることは、何の違和感もない。もう一度詩(第一首)を掲げてみよう。

黄壤詎んぞ我を知らむ

白頭徒らに君を憶ふ

唯、老年の涙をもつて

一たび故人の文に洒ぐ

いま紫の上は冥界にいる。冥界の紫の上はいま残された自分の悲しみがいかばかりか、おそらく思い及ぶことはないであろう。

わが身はもはや老いて、空しく紫の上に追憶をはせるばかりである。いま自分がすることといえば、老残の涙を手紙の上に落すばかりである。

ここに何の不自然も感じられないであろう。さらに源氏では「げに千年の形見にしつべかりけるを」といい、後々に残すべき思いを抱かせるものとして紫の上の手紙を言うが、これを「骨を埋むれども名を埋めず」といいかえることができるだろう。

源氏では主人公の老を「人もあまり心弱しと見たてまつるべきが」と他人の目を通して語られる。その老は白詩の中心の主歌となっていて、老年の涙を洒ぐという。

こうして源氏物語がここに白詩をはめ込んだ意図は、主人公の白頭の老を強調し、死者へのなごりのつきなさ、後々残るべき手紙であることを一層強く言いたかったところにある。

元宗簡への白樂天の思いを知っているものにとつて、源氏と紫の上との心の交流は一入深いものとなったであろう。

## 九 贈皇甫庶子―朝顔

白樂天の友人の中で皇甫を名のる人が何人かいる。その一人が「皇甫庶子」とよばれた皇甫鏞である。

白と鏞との交遊は宝曆元年（八二五）のころにしきりだったといわれるが、その十一年後、開成元年（八三六）七月十日に鏞は死去する。白六十五歳。その後十月三日に「唐故銀青光祿大夫太子少保安定皇甫公墓誌銘并序」という墓誌銘を制作した。それほど慕っていたことがわかる。

その理由は鏞が「俗縁を避け、幽独を好む風趣高遠の士であった」ことだと、堤留吉氏は説く。<sup>(11)</sup> 白樂天はこの家風を美として親交を重ねたのであろう、と。

氏がその例としてあげる詩は、その言を肯うことができる。摘要、示してみよう。

名利既に両つながら忘れ、形体方に自ら遂ぐ。

臥して掩ふ羅雀の門、人の我が睡りを驚かす無し。

睡足りて衣を抖擻し、閑に中庭の地を歩む。

食飽きて腹を摩挲し、心頭一事無し。

（寄皇甫賓客<sup>後集</sup>卷五十一）<sup>(12)</sup>

先の「銀青光祿大夫太子少保安定皇甫公」がわざとらしく見えてしまうほどに、隱逸の趣が漂う生活の様子である。この詩だけを見ていると深山幽谷に住んでいたのかとさえ思われるほどであろう。もちろんそうではない。大隱は市に隱るのたえよろしく市井にいるし、羅雀の門を閉じて出ないのではない。もう一つ、堤氏が例とする詩は、その一面における鏞の、白との交友を告げる。

輕衣穩馬槐陰の路、漸く東に近づき来れば塵少なし。

耳聞<sup>きわが</sup>しうして久しく俗事を聞くを憎み、眼明らかにして初めて閑人を見るを喜ぶ。

（中略）

始めて信ず深交は久遠に宜しきを、君と転<sup>うた</sup>た老いて相親し。

（贈皇甫賓客<sup>後集</sup>卷五十七）

白が鏞を訪ねる。そして世俗から遠い閑人を見て喜び、ここで初めて深交のよさを信じることができる。もちろん、ともどもに老を迎えていることが、この心境を親しくさせるであろう。

これらに見られる閑居と老は、他の詩にも同様に現われる。「別詔忽驚新命出」（酬皇甫庶子見寄、卷二十三）は才能もないのに詔の下ることを驚いているのであり、願わくは官途から遠ざかっていたい。「博望苑中無職役」（与皇甫庶子同遊城東、卷二十三）も城東に間遊する欲びが、職役による束縛から逃れることにあったことを、物語っている。

そしてまた前詩は「秋鬢蒼浪老大時」といい、老を先のものと共通させる。

さて、この皇甫鏞に贈った一詩が、源氏物語に引用された。

まず源氏の本文を先にあげておこう。

御門守寒<sup>みかどもり</sup>げなるけはひうすすき出で来て、とみにもえ開<sup>あ</sup>けやらず。これより外の男<sup>ほみ</sup>はたなきなるべし、ごぼごぼと引きて、「錠のい<sup>き</sup>といたく錆びにければ、開<sup>あ</sup>かず」と愁<sup>おも</sup>ふるを、あはれと聞こしめす。(朝顔)

この御門守がいうことば「錠のい<sup>き</sup>といたく錆びにければ、開<sup>あ</sup>かず」が次の白詩の引用とされるのである。<sup>(13)</sup>

並べてその白詩をあげる。

何因散地共徘徊 人道君才我不才  
騎少馬蹄生易蹶 用稀印鑠洪難開  
妻知年老添衣絮 婢報天寒撥酒醅  
更愧少胥諂拜表 单衫衝雪夜深来

(贈皇甫庶子、卷二十三)

この詩も一読上掲の詩と共通する心境、交友のさまが読みとれるであろう。「人道君才我不才」は才能のなさを恥じる前詩と共通し、そのことは、そのまま官途にある憂いにつながっていく。隠逸を願う裏がえしの表現である。だから「更愧少胥諂拜表 单衫衝雪夜深来」ということにもなる。

また「寄皇甫賓客」がそうであったように、白もまたひとり邸にあることの閑趣を好み、「騎少馬蹄生易蹶」状態で、だから「用稀印鑠洪難開」という具合にさえる。

そしてさらに、この詩でも老が歌われる。「妻知年老添衣絮」と。この衣服は、いきおい第三句の「騎少」をうけつぎ、結局は第四句の状態になることと、一連のものであろう。

ここに多少ふれたものも含めた皇甫庶子に贈った五詩の中で、私はこの詩がもっとも優れているように思う。城東に遊んだ詩も軽やかな心の晴れやかさが快いし、槐樹の道に馬を進める詩「贈皇甫賓客」も、足どりが軽やかだが、やはり白の生活がきちんと描写されて据えおかれているし、何やら陶淵明をちらつかせているのもおもしろい。

もし源氏にこの詩が引かれているのなら、何を排した理由もわかる。この詩は他の皇甫関係の詩以上に、人々に知られていたのではないだろうか。

はたして人口に膾炙し、源氏に引用されているといつてよいのだろうか。たしかに詩同様、源氏の季節も冬に設定されている。「婢報天寒撥酒醅」と。そしてまた「单衫衝雪夜深来」と。いかに鍵が開かないという一項が共通していても、上掲の城東に遊ぶ詩のような麗しさをもっていれば、これはとてもそぐわない。「御門守寒げなるけはひ」というのは、詩からともどもに看取された表現である

う。

そしてまた「天寒撥酒醅」を告げるのは婢である。この婢は源氏では「寒げなるけはひうすき出で来」た御門守に対応する。そもそものがふうに入出入りする「北面の入繁き方なる御門」ではない。世間にとって、裏側の門が今の舞台であり、それは御門守や婢の世界である。

門はなかなか開かなかつたという。これは上掲の羅雀の門である。「寄皇甫賓客」の冒頭のこのあたりを如実に思い出させる描写である。当面の白詩の門は白のそれであり、上掲詩の門は皇甫のそれで別だが、お互に尊重し合う価値が、たやすく門を開けないところにあるのだから、これは問題にならない。

しかも源氏では門がなかなか開けられなかつたことから光源氏の述懐をよび起こし、

「昨日今日と思すほどに、三年のあなたにもなりける世かな。

かかるを見つつ、かりそめの宿り<sup>やど</sup>をえ思ひ棄てず、木草の色にも心を移すよ」と思し知らるる。口ずさびに、

いつのまによもぎがもとむすほれ雪ふる里と荒れし垣根ぞ

やや久しうひこじらひ開けて、入りたまふ。

(朝顔)

と叙述がつづく。まるで門が開くまでの頃合を測るかのように回想がめぐるわけだが、この回想は、いささか仏教色を帯びているにせ

よ、仮りの宿りの世に、浮華に心を移すという述懐であり、白や皇甫が心をくだいていたあり方と同じものが、光源氏の中に兆している。

じつは右の「三年のあなたにもなりける」という述懐が、うまく辻褄が合わないらしい。古典全集の頭注にも須磨帰京後（五年になる）、桐壺崩御後（九年前になる）、式部卿の宮薨去後（一年にならない）をあげて、いずれも合わないから「作者の不注意による過誤か」とあるが、三年前、つまり一昨年といえは光源氏三十歳の年で、源氏物語から一年間が欠落している年である。その年に何があったか、残念ながら知るよしがないのだから、他へ持っていく前に、この年のこととして何かを考えるのが順序というものであろう。

しかも桃園の邸を訪ねてのことであれば、当然桃園の、式部卿の宮についてのことにちがいない。「朝顔」の巻は、もう冒頭から桃園の邸を描写して、

ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。

(朝顔)

と語られる。当面の述懐はこの長月の記述をひきつぐものである。

この荒廃をもたらしたものが三年前にあったというのだ。われわれは知るべくもないのだが、おそらく式部卿の宮の一身上の変化であらう。致仕であらうか。その上で今年の夏の逝去があったのではないか。

もしこのきわめて単純な読み方が許されるとすると、宮は「少胄諮拜表」ということもなく、「別詔忽驚新命出」ことにもわずらわされず、「博望苑中無職役」という境地にあったことになる。

もちろん、その裏がえしとして羅雀の門となり「騎少馬蹄生易蹶用稀印鎖淡難開」という状態であった。

そこにはいま、雪が降っているらしい。光源氏は「衝雪」て来たことになる。この「天寒」ともいう天候は、貧寒という語を思い出させるが、それは「末摘花」の屋敷を訪れた時の段を、いやでも思い出させるではないか。常陸宮の邸も同じように荒れていて、「御車寄せたる中門ちゅうもんの、いといったうめがみよるほひて」(末摘花)いた。もしこの鍵を開けようとすると、ゆがんだ戸が簡単に開くはずもない。

のみならず、ここでも門番は「衣は雪にあひて煤すすけまどひ、寒しと思へる気色ふか」かった。作者は照合を狙っているであろう。そしてこのところにも白詩「重賦」がこめられていることが、万人によつて認められている。

そもそも式部卿の宮がいた、いま舞台となつてゐる邸は、「一条通り北、大宮通り西のあたり(15)という」。この式部の邸は、やはり都の中心に位置する、華麗な顯官の邸とは違うものである。たやすく門を閉じることできる、世俗とは距つた邸であつたろう。白が出かけていった皇甫の邸と、同じように印象されるものである。

さて、この舞台は、もう一つの白詩のモチーフ、老を語るものでもあつた。例の御門守自体が表現されていないにしても、いかにも老人らしく思えるではないか。それは「末摘花」からの推論だけではあるまい。

ところが、この邸そのものが老の空間である。

故式部卿の宮の邸には五の宮がいる。光源氏がまず会う相手だが、宮、対面たいめんしたまひて、御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、咳せきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿おほとの宮は、あらまほしく古ふるりがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかに、こちごちしくおぼえたまへるも、さる方なり。

(朝顔)

という。比較されているのは葵の上の母、太政大臣の妻として生涯を晴れやかにすごしたのと違つて、この五の宮はとかく恵まれなかつた。その宮がいま、「いと古めきたる御けはひ」で咳きこんでいるのである。宮は、兄の式部卿の宮にも先立たれ、老残の身でここにいる。

源氏に語る話も、いきおいしめりがちである。その話をきくと、五の宮の老がいつそう目立つ。

かしこくも古りたまへるかなと思へど、

(朝顔)

のように。

じつは、あの老婆、源典侍が登場する下地は十分にあつたのであ

る。この時、ほぼ七十歳。いやこの女性は十三年前に登場した最初から「年いたう老いたる典侍」(紅葉賀)といわれ、「人の漏り聞かむも、古めかしきほど」(同)だといわれている。わざわざ「老」をテーマに設定した人物に他ならない。

だから彼女が「紅葉賀」で果たした役割は老女との恋という、いささか猟奇的な状況を作ることにあつたが、今は、もう狐狸の住み家になりかねない邸の古さを象徴すべく再登場したのだつた。

門がようやく開いて中に入った光源氏は五の宮と対面し「古事どもそこはかとなきうちはじめ」宮が語ることを聞いていると、もう五の宮はいつか寝入ってしまう。しかも、

のたまふほどなく、いびきとか、聞き知らぬ音すれば

(朝顔)

という体たらくの老人ぶりである。

源氏はやつと喜んで姫君に会えると思うが、物語は若者の介入を許さない。

またいと古めかしき咳うちして、参りたる人あり。(同)

源典侍である。彼女は「院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」と昔も老人であつたことをいう。

以後の節で老を問題にするせりふは枚挙にいとまがない。昔を思い出すことは今の老を語ることであつた。

こうして、故式部卿の邸は「老の空間」といったものを、あえて

作り出そうとする意図を明らかにさせる。それはまるで、ひとり若々しい姫君を引き立てるように、周囲を黄昏で包もうとしているごとくである。

あの夕顔も、ひとり夕暮にとり残されたようひっそりと置かれていた。それとあい対応するように、朝顔が置かれている。

ひとり光源氏の好き心だけが若やいで見えるが、それでもこの年の最大の悲劇は藤壺の死であり、右のくだりの後、藤壺をしみじみと思い出している。光源氏の周辺にも、暗い喪の色がたちこめていく。

白詩がもつ老のモチーフは、こうして朝顔の巻の邸にも用意されていた。その点をもつてしても、当面の鍵の句から白詩を思い出し、でも、何ら不都合はなかったであろう。

その上でいえば、当面の白詩の引用は、官界の外にある空間がもつ自由さと貧寒さ、また人生の傾斜を読者に思い起こさせる。

その空間は白が皇甫と交わし合ったように純粋な心の自由があり、光源氏は五の宮という長い交渉をもつ女性との間に、式部卿の宮など多くの故人たちをしのぶ、過去の総量に見合うなつかしさを楽しむことができた。

しかしその世界は明らかに回顧的であり、今日の栄華や隆盛からは遠い世界であつた。たやすく現在の老を引き受けざるをえない世界である。その点も皇甫に対する白の心境とひとしい。

だから鍵があかないという、その鍵穴は、そこからのぞき見られる光源氏の深層を読者に見せようとする窓かもしれない。若い前斎院に心を傾けていても、少しずつ光源氏の心をむしばんでいる老と、官途のうとまじさがあつたことを。

十 河亭晴望<sup>九月</sup>―須磨<sup>八月</sup>

「須磨」という巻が、まるで白詩づけであることは、誰の目にも明らかであろう。須磨へ到着してから「三千里の外」と楊梅館の詩(卷十三)を引き、「枕をそばだてて」という有名な遺愛寺の鐘を聴く詩(卷十六)があり、「二千里外故人心」という元九を憶う詩(卷十四)がある。しかも話題が須磨から外れると白詩からも遠ざかり、戻るとまた白詩が引かれるというごとくである。

その傾向の一つとして、また次の例を加えることができる。<sup>(16)</sup>

ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁<sup>かり</sup>の連ねて鳴く声<sup>おと</sup>楫<sup>かぢ</sup>の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠<sup>ずず</sup>に映えたまへる、古里<sup>ふるさと</sup>の女恋しき人々、心みな慰みにけり。

(須磨)

白詩は「河亭晴望<sup>九月</sup>」(卷二十四)である。

風転雲頭斂 煙銷水面開

晴虹橋影出 秋雁櫓声来

郡静官初罷 郷遙信未廻

明朝是重九 誰勸菊花杯

源氏は須磨へやってきて、今や心づくしの秋を迎えている。月は七月のころであろう。そこへ雁の声が櫓の音にまがえるように聞こえてきて、望京の念が少しやんだという。

これに対する白詩は宝暦二年(八二六)の九月八日の作、蘇州でよまれたものである。

この時白は怪我と病気にさいなまれる。二月に落馬して足を傷めたかと思うと、このころから咳と咳に苦しみ、三十日にわたって臥床した。眼病も治らず、五月六月のころに百日の休暇を願い出ることとなる。そしてついに、官を罷める結果となった。詩に見られるとおりである。

すでに「須磨」には白詩が多いといったが、右の詩は重陽の前日つまり九月八日の詩であるのに対して、次に引かれる白詩は八月十五夜のもの。これは須磨でも八月十五夜を迎えているからきちんと対応するのだが、その夜のこととして『菅家後集』の例の「恩賜の御衣」の引用がある。これは重陽の折の詩で一日後の九月十日の作である。

だからこのあたりは原詩の日付に忠実に引くのではない。むしろ意図的に解体し、その部分の功用をはかろうとするもののだといえよう。



当面の詩も重陽前日を匂わせようとするものではない。

それではいかなる功用を目論んだものであろうか。まずは雁の声が櫓の音のように聞こえるという卓拔な比喩を活用した点は炯眼であろう。両者の声は似ているというのだから都合がよい。ましてや、この直前に、

沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。

(須磨)

とあるのだから、天と海とは音を呼応させて、流謫の思いの中にあ  
る人びとを包む。

この海の描写は、「煙銷水面開」というように、波浪を感じさせ  
ないと思うが、どうであらう。比較的穏やかな水面に思えるのであ  
る。

ところで、この場面の人々の心情はどのようなものか。光源氏の  
手つきが黒数珠と照応し合つて、古里に女を残した人々の心が慰め  
られたというのは、私の趣味には少々なじみにくくて嫌だが、とに  
かく「心みな慰みけり」というのは、たしかである。

辺地の閑居は閑居なりに、一つの調和を求めてゆくのであろうか。  
そしてその心境は白詩にも見られるように思う。「郡静官初罷」  
というのは先にもふれたように、ここで官途を離れたことを意味す  
るが、それなりに白の心は晴朗のように見うけられる。題も「晴  
望」という。

「風転雲頭斂」と風景も静かであり、心境もこれと呼応する。詩の  
後半「郷遙信未廻 明朝是重九 誰勸菊花杯」もどうよめばよいの  
か。消息を恋しがり、菊酒を都の者と共にしえなうといつて、あ  
道真のように断腸の思いでいるのだろうか。

どうも私にはそう思えない。白はこの後閑雅な遊覧の日をすごし、  
十一月になつてやつと洛陽へ向かう。その間の心境はそれなりに穏  
やかで、蘇州の重陽前日を楽しんでいるのではないか。

蘇州だから櫓声といつても、激浪に対抗するような音ではない。  
この街にめぐらされた運河のゆるやかな水面を、優雅に渡つてゆく  
櫓の音であらう。もしこの白詩を「須磨」から想起した読者がいた  
としたら、荒々しい響は、聞こえて来なかつたはずである。

だから激しい流謫の思いをこの引用に託そうとしたのなら、引用  
は失敗だったというべきだろう。一概に「須磨」といっても、感情  
は一樣ではない。先へ少し進んでゆくと中秋の名月をめぐる悲しみ  
があるが、このところは一つの間奏曲のように、別のトーンを響か  
せていると見える。

この穏やかさは、やはり「官初罷」というところにある。今や  
須磨で無官となつた光源氏は、それなりに悲しいが、一方官にある  
ことを傍から眺められる目を、与えられたといえるだろう。

少くとも「官初罷」の詩句を連想させられている読者は、この連  
想の中に光源氏を置くことが、強制されている。無官になつて見え



てくるものを見せようというのが、この引喩であつたと思われる。

注

- (1) 年譜に関しては堤留吉『白楽天研究』三九―四一ページを参考とした。
- (2) 施鳩堂『白居易研究』九九ページ。
- (3) 岡村繁『白氏文集』では関連個所に「白居易に(と)同年」と記すが、アーサー・ウェーリー『白楽天』(花房英樹訳)では七四四―八二五とする(二二―二一ページ)。ちなみに白は七七二年の生まれ。
- (4) 同右二一―二二ページ。
- (5) 注1の前掲書三八ページ。
- (6) 拙稿「源氏物語の結語」(中国古典鑑賞講座『白居易』)ほか。
- (7) ほかに古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語』一〇ページ、丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』一〇七ページ、阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集 三卷四二ページ)が引用を認める。但し丸山氏は「類似」とし、阿部氏ほかは『孟津抄』の紹介という形をとる。
- (8) 注7の古沢氏、丸山氏など。
- (9) 注3の『白楽天』三五四ページ。
- (10) 「梅枝」において引用に言及しなかった古典全集本も、ここでは「によるか」とある。
- (11) 堤留吉『白楽天研究』一八〇ページ。
- (12) 堤氏のテキストのまま揭示する。

- (13) 注7の古沢氏、丸山氏など。
- (14) 注7の全集本二卷四七二ページ。
- (15) 前注に同じ、二卷四五九ページ。
- (16) 注7の丸山氏、古典全集などが引用と考える。

なお、文中に引用した本文は、次のものによる(ただし、白氏文集は他本を参照した個所がある)。

- (一) 「源氏物語」阿部秋生・秋山虔・今井源衛注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九七〇―一九七六年。
- (二) 「白氏文集」『白氏長慶集 上下』(長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』) 汲古書院 一九七四年。